外国語2組（木４）授業リフレクション

①生徒に自信を持たせること、そして生徒の「表現したい」という意欲を最大限引き出すことが教員の使命だと感じました。また、聞くと当たり前だと思うようなことでも、その当たり前は教員の共通認識ではないのだと感じました。まず、生徒が英語に慣れ親しむためには自信を持たせないといけないことが大事です。大城先生がお話しされていた研究授業の話が非常に印象的でした。研究授業であえてできない生徒にあてることで、その子に自信を持たせるという行為は素晴らしいと思います。先生は自分をよく見せるために授業を披露したのではなく、あくまでも生徒に自信をつけさせることを優先したのだと推測します。とても感銘を受けました。さらに、短冊に願い事を書かせるという活動は生徒の「表現したい」という意欲を尊重し、引き出す効果的な方法だと思います。与えられた単語を機械的に並べるだけではなく、自分の表現したいことを自分で考えて書かせることは生徒の英語に対する意欲を高めると思います。例えば、前もって先生が “ video game, money, bag, car”などの単語を与えて作文をさせても、その単語内に生徒が実際に欲しいものがないこともあります。なので、生徒にもっと選択の裁量を与え自由に表現させることが必要です。最後に、英語ができる人にとっては当たり前だと思うことでも、初学者には難関であることを再認識しました。英語の発音は書いたとおりに読めばいいわけではなく、不規則です。その不規則性を学習して読めるのが当たり前になったわれわれにとっては、読めて当たり前だという考えに陥りやすいです。ただ、先生もおっしゃっていた通り、例えば “C”は/si/と読むと習ったのに “ Cool”の　“C”は/k/で発音されるのは生徒にとっては「裏切られた」気分です。英語の発音は難しいということを念頭に置くだけでも生徒に教える際の姿勢が違ってくると思います。まとめると、先生は初心に帰って生徒の気持ちに立ち、生徒の意欲を引き出す指導法を実践することが大事だと思いました。

②今回の講義を通して小学校の英語教育における「読む」「書く」という2分野に焦点をおき考えることが出来ました。授業の中で大城先生もお話されていましたが、「聞くこと」そして次のステップとして「話すこと」と手順をしっかりとふむことが言語を学ぶ上でとても重要であることに改めて気がつくことが出来ました。生まれた時から日本語が話される環境で育ち自然と聞き、お母さんの真似をして話せるようになるという様なことが無意識に行われ、当たり前だと思っていたのですが、この様な「話す」「聞く」という経験を繰り返すという経験こそ、第2言語学習者にとってとても重要なのだと気づくことが出来ました。このことを考えると、小学3,4年生での授業において「聞く」「話す」ということについて改めて特化出来る授業作りを行いたいと強く思いました。多くの子ども達が、しっかりと英語に触れる時期がこの小学3,4年生だと考えられるのでこのスタートを子ども達にとって英語に親しみを感じてもらえるようにしたいです。また、今回の授業で特に、英語では表記と音声が一致しない、aでも色々な読み方があるなど日本語と英語の音声の違いを伝えていきたいと思いました。この違いを難しいと感じてしまうと思うのですが、単語どうしで比べるゲームなどのアクティビティを通して子ども達が自然と違いに気付き楽しく学べるということを意識して授業を作りたいです。また、学年が上がり「読むこと」「書くこと」と学習範囲が広くなってもコミュニケーション、相手との対話ということを忘れずに授業を進めたいです。また、実際の現場の先生が行われていた「wordslist」の作成などを積極的に行い、子ども達が話したいことを話せるという環境づくりを行うことが大事だということを改めて学ぶ事が出来ました。教員として、児童の状況に応じて臨機応変に対応出来るようにしたいです。また、苦手だと感じている子ども達へのサポートをきちんと行いたいです。

③今回の授業を通して、小学校では英語の４技能をどのレベルまで育成するべきかについて学ぶことができました。また、実践例を視聴したことにより、授業で英語を楽しみながら勉強してもらうための工夫を知ることもできました。中学生になってから英語を学ぶということは英語の４技能全ての指導を同時に始めることであり、学習者への負担が大きいため、中学生になって英語で躓く人が多いのだと納得させられました。私達が日本語を学んだときと同じプロセスで英語も学習してもらうことを意識しながら授業作りを行っていくことで、子ども達への負担が少なくなり、英語を楽しみながら学ぶことができるようになるのだと感じました。そのため、小学校中学年では「聞くこと・話すこと」を中心に行い、高学年で「読むこと・書くこと」も少しずつ増やしていくことが求められるのだと思いました。高学年では、初めて見た単語を自分で音声化するといった高度なレベルを求めるのではなく、慣れ親しんだ単語のつづりを識別したり、英語の文構造と日本語の文構造の違いについて気付かせることを目的とすることも学びました。子ども達が英語の授業で躓かないようにするためには、語学の学習プロセスを意識すると同時に、子ども達の意欲を高めるようにワードリストを作成して自分が伝えたいことを伝えられるようなサポートを行うことも必要だと感じました。

④今日の講義を通して、授業者が言語学習の自然な流れを十分に理解し、子どもが間違いやつまずきを起こす点について、その要因を考える必要性がわかりました。まず言語学習の自然な流れについて、文字指導の前に音声指導を十分に行うことが重要だと学びました。私達が日本語を話せるようになる過程では、はじめに言葉のシャワーを浴び、言葉の意味を理解できるようになり、読み書きを学んでいきます。外国語を学ぶ時もそれと同じで、むしろ、知らない言語を１から学んでいく子ども達が感じる不安や困難に配慮する必要があり、私も子どもが安心感や充実感を感じられるように働きかけていきたいと思いました。それから、子どもが英語学習でつまずく点として、日本語のように音声と文字が一致しないことや、大文字と小文字で形が変わること、日本語を書くように字間を詰めてしまうという要因があると学びました。私自身も昔はそのように感じたこともあったと思うのですが、その時の感覚をすっかり忘れていました。私が思うに、授業者が子どもの悩みやつまずきに気づかない、気づけないというのは教師として1番よくないことだと思います。今回の講義で、そのことに気づくことができました。自分の当たり前を押し付けず、いつでも教育的配慮を忘れない授業者になりたいと思います。